

# 鬼火の町

松本清張

文春文





文春文庫

106—72

---

鬼 火 の 町

定価はカバーに  
表示してあります

1987年10月10日 第1刷

著 者 松 本 清 張

発行者 西 永 達 夫

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

東京都千代田区紀尾井町 3—23 〒102

TEL 03・265・1211

---

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan

ISBN4-16-710672-8

鬼 火 の 町

松本清張



目次

幽霊船	7
煙管の追及	30
厚い壁	51
煙管の持ち主	72
屋形船	92
再び乗出す	105
挑戦	130
雲の中	150
夜と昼	171
五分の魂	190
結束	204
首なしの水死人	225
釜木の着想	239
川路三左衛門という男	256
浦風参詣	269
二階の俳人	283



鬼火の町





# 幽 靈 船

1

天保十一年五月六日の朝のことである。

隅田川の上に厚い霧が白く張っていた。浅草側の待乳山まちちやまも、向島側の三囲神社みつめぐりも白い壁の中に塗り潰されたようである。

「えれえ霧だ。一寸先も見えねえとは、このことだ」

と、独り言を呟つぶやいた小舟の船頭がある。夜が明けたばかりで、六ツ（午前六時）を少し回っていた。

舟は千住せんじゆのほうから来たのだが、折から上げ潮にさしかかっているので、水の流れも湖水のように動かない。うっかりすると、方角を間違えて、どこかの岸にぶつつかりそうだった。

現在なら汽笛でも鳴らすところだが、当時のことで、鼻唄でも唄うほかはなかった。船頭が警戒したのは、不意に、その厚い霧の中からはかの舟が正面に現れることだった。もっとも、

朝が早いのでほかの舟も少ないに違いないが、しかし、一艘でも衝突の危険は同じだった。どのくらい漕いで行ったか分らぬ。兩岸の目標が乳色の中に塗りこめられているので皆目見当がつかなかった。

と、船頭は、前方に何かを見つけ、あわてて櫓を大きく動かした。舟はぐっと斜めに逸れた。云わないことではない。不意に三、四尺前方の水の上に、黒い舟が眼に入ったのだ。

「やい、危ねえじゃねえか。こういうときはドラ声でもいいから、唄でもうたっている」と、彼は前方に怒鳴った。

すんでのことにぶつつかるところを危うく躲した船頭は、相手の舟の横をすつと擦るように通った。

「おや？」

と、ひとりで声が出たのは、その舟に人が乗っていないのを見たからである。霧から現れた舟は、やはり霧の中に亡霊のように漂っている。

船頭が櫓をとめたのは、不注意からその舟の者がその辺に落ちていないかと考えたからだ。だが、彼の視界にある限り、黒い頭も浮いていないし、霧の中で泳ぐ音もしていない。

船頭は、自分の舟を相手の舟に接近させた。それは猪牙といわれる小舟で、船宿が釣客のために出すものだ。

中をのそくと、座蒲団一枚と、蓆盆、火鉢とがちゃんと載っている。

それだけではない、釣の道具も残っている。舷から水に下げた魚籠には、五、六匹の魚も

泳いでいた。櫓は漕ぎ手を失ったまま、ぶらぶらと水に翻なまられている。要するに、たった今、船頭も客もどこかに上がったあとというところである。

しかし、それにしても両方の岸は遠い。霧に遮られているが、距離の見当ぐらいはつく。「面妖なことがあるものだ」

と、船頭がなおものぞくと、座蒲団には、酢漿草かたばみの紋が海老茶の地に白く染め抜いてある。その端には、「つたや」の染め抜き文字も読めた。

また、火鉢の傍の茶瓶にも、湯呑にも同様のしるしが付いている。

「不用心なことだ」

と、船頭はまた呟いた。このときは、そうとしか考えられなかったのである。彼は、その人の居ない舟から離れると、自分の舟の舳先へさきをぐいと右に寄せた。

このころから、少しずつ霧が霽はれていった。そのうすらぐ白い膜の中から、柳橋一帯の家並みが墨絵になって見えた。両国橋もぼんやりと浮んでくる。

船頭は、その家並みのほぼ真ん中あたりの見当に舟を寄せた。この辺は船宿が多い。それぞれ棧橋が水に突き出て、屋根舟や猪牙が、無数につないであつた。

「おおい、つたや」

と、船頭は、そこから陸おかにむかつて呼んだ。

「おめえとこの舟が、船頭も居ねえで流れてるぜ」

すぐには応こたえがない。

この界限は、茶屋、小料理屋、船宿といった、水商売の家がかたまっている。いずれも夜が遅く、朝も遅い。六ツ半だと、まだ彼らの世界では真夜中である。

しかし、この船頭は親切だった。いや、ただ親切というだけでなく、いま霧の中で見た小舟がいかに不思議でならなかったのか、そのまま見過してゆく気になれなかったのである。

「おおい、つたや」

船頭は呼んだ。もともと、大川で鍛えた声である。朝のことではあるし、よく透とほった。果して、しばらくすると、雨戸を繰る音が、その一軒から聞えた。

「何んだ、何んだ？」

と、向うで応えた。これが「つたや」だったのだ。

「おおい、おめえとこの猪牙が、人も居ねえで上かみのほうに漂かってるぜ」

先方では、どこだ、どこだ、と訊き返した。

「それは、つい、上手のほうだ。霧が深えからよく分らねえが、おいらの見当じゃ水戸さまのお米倉の前かあたりだと思う。どうしたえ、人が居ねえのは妙じゃねえか？」

これには答はなく、ただ、

「ありがとうよ」

という礼が返ってきただけだった。

「ちえっ、仕方のねえやつだ」

と、船頭はぶつぶつ云ったが、とにかく、漂流している舟を所有者に知らせただけで満足し

たらしい。そのまま舟を川下へ流して行った。

「もし、おかみさんえ」

と、その船宿「つたや」の二階の梯子段はしこだんから、若い者が呼んだ。

「おかみさんえ、もし」

「つたや」のおかみは、おろくという女だったが、二十七、八の年増とし\*である。箱枕から撞もたげた顔に青い眉をひそめて、

「何んだえ？」

と、梯子段口の男に訊き返した。

「お早うございます」

と、若い者は襖越ふすまこしに、

「いま、妙な届けがありましたぜ。なんでも、うちの舟が水戸さまの米倉の前あたりで、誰も乗ってねえで水に浮いてるそうです」

と告げた。

「おや、そいじゃ、仙さんの舟だねえ」

おろくはすぐに云った。

「へえ、わっちもそう思っています。昨夜出た夜釣りの猪牙といやア、仙の舟しかありませ  
ん」

と、若い者も応える。

「人が乗ってないというのは本当かえ？」

「通りがかりの舟は、そう云っておりやしたぜ」

「すぐに支度をして見に行っておくれ」

「合点です」

二階の下から、舟が出て行く水音がした。おかみは手早く着更きかえて障子をあけ、川面かわもを眺めている。まだ残っている霧の川面に、勘藏の漕いで行く舟が一点眺められた。あとは芝居の書割のような、静かで動きのない両国橋辺の風景なのである。

それから小半刻（三十分）の間が騒動だった。

勘藏の曳いてきた猪牙には、きっきの船頭の報しらせ通り、仙造ばかりでなく、客の姿もない。これは川に落ちたとか考えられなかった。

だが、それにしても、舟の中の火鉢にも埋うづみ火が残っているし、茶瓶、湯呑、座蒲団は、そのままになっている。

船宿のおかみのおろくも不安そうに首をかしげた。

「昨夜の客は、たしか、和泉屋いずみやさんとこの惣そうさんだったねえ？」

「へえ、左様で。今夜は久しぶりに休みだから夜釣りをするといつて、顔馴染みの仙造を伴たれて出て行きましたがね。あつしはてつきり、大川端か、浦安あたりまでのして行つたと思ひ、昨夜帰らなかったのも気に留めませんでしたかね」

古くからいる船頭の弥兵衛は云った。

和泉屋というのは、主人は八右衛門といい、江戸で聞えた屋根師やねしだった。いつも大きな仕事を請負って、大名の下屋敷や、大身の旗本屋敷などに入入りをしてゐる。昨夜の客は、その和泉屋の職人で惣六という若い者だった。腕は立つほうである。

惣六は釣りが好きで、休みの日にはよく舟を出させる。船宿「つたや」の馴染み客であった。惣六は、川釣りもやるが、ときには沖釣りもする。昨夜も気心の知れた船頭の仙造の舟で出たのだが、明けがたまで帰らなかつたのは、夜通し釣りをすることもあるからで、船宿でも心配してゐなかつた。

「妙ですね。それが、つい、向島に近ちかえところで舟を止めていたというのは、どういう次第でしょうね？」

と、船頭たちも不思議がつていた。

とにかく、当人二人が共に姿がないので、まず、それから詮議しなければならぬ。

「喧嘩でもしたのかねえ？」

と、おかみのおろくは云つた。

「それにしちや舟の中がきれいすぎますよ。ちゃんと道具も揃そろえて残ってましたからね。喧嘩なら、その跡が舟になくちやならねえ」

そう云う船頭もいた。

「よしんば喧嘩がはじまつたとしても、今ごろまで行方が知れねえというのは理屈に合わねえ。客の惣六さんはともかく、仙の野郎は泳ぎが達者ですからね」

「みんな、川のほうを調べておくれ」

と、おかみは船頭たちに云いつけた。霧もすっかり霽れて、明るい陽が景色に充ちていた。

## 2

その日の午すぎのことである。

駒形に住んで、この辺を縄張りとしている御用聞きで藤兵衛というのがいた。その藤兵衛のもとに、百本杭にいま男の死体が二つ流れ着いた、という報告が手下の幸太からもたらされた。「見つけたのは、橋番ですが、いま、死骸を陸に引揚げたところです。早速、船宿のつたやに知らせる者があって、つたやからも人が来ていますよ」と、幸太は上がりかまちに尻をかけて云った。

「おめえの話は、いつも中が飛んでいる。その死骸と船宿のつたやとは、どういう因縁があるんだえ？」

藤兵衛は、長火鉢に煙管の雁首を叩いた。

「急いでいるので云い忘れましたが、その死骸の一つがつたやの船頭の仙造という野郎だそうです。客のほうは、屋根師和泉屋八右衛門の職人で惣六という者です」

「その船頭と惣六とが土左衛門となって百本杭にひっかかったというんだな？」

「そういうわけで。だが、まだ土左衛門というほど古い死骸じゃございません。とにかく、親分、行って見て下さい」



「八丁堀の旦那がたは、もう見えているか？」

「いいえ、まだです」

「旦那がたに先を越されちゃ面目ねえ。よし、すぐ行く。おい、お灸、羽織を出してくれ」

藤兵衛が両国橋を渡って本所側の百本杭に着いてみると、蓆を二つ被せた死骸を中心にヤジ馬がたかっている。それを両国橋の東詰橋番が追散らしていた。

藤兵衛は、その一つ一つの蓆をめくった。彼は死骸の着物を脱がせ、丁寧に身体を調べた。船頭の仙造も、客の惣六も脾腹のあたりに青い痣が出来ているのが藤兵衛の眼に止まった。

「藤兵衛、早いな」

うしろから声がかかった。

振向くと、八丁堀の同心、川島正三郎が立っていた。横には小者が二人ついていた。

「これは、川島の旦那、ご苦労さまでございます」

藤兵衛はお辞儀をした。

「どうだ、船頭が客といっしょに水に溺れたんじゃしようがねえな。こいつは客も浮ばれめえいや、洒落じゃねえぞ」

同心の川島は笑いながら云った。

「へえ……どうも、普通に水に落ちたとは思われません。双方とも脾腹に当身を喰っておりま

す」  
「なんだ、喧嘩か」